

実験パロディ



イラストレーション：
間芝勇輔

折り機のタブー!?

斜めにグチャッと 「いいかげん折り」に挑戦!

書籍の本文やパンフレット、冊子、パッケージなど、印刷した後に紙を折って後加工するものは多々ある。そんなとき使われるのが、紙をも噂によると、水平、垂直にまっすぐ折ることは得意だけど、ぐちゃっと適当にとか、斜めにとか、そんな曲がったことはできない……とか。手作業に頼るしかないと思っていた「斜めに折る」ということを、今回は機械で挑戦だ!

書籍や雑誌、DMや小型グラフィックスなどなど、印刷物を「折る」ことはよくある。どう折ったらいいか、いろいろ悩むことも多いが、その悩みは「縦横、どうやって組み合わせるか」ということだろう。機械で折るということを知ってれば知っているほど、「斜めに」とか「グチャグチャに」折るなんて無理だということも、もう身体に染み付いていて、トライしようなんて思いもしなかったりする。

「子どもがめちやくちやに折ったみたいなの折りができるといいのになあ。あと、本フランス装を機械でやってみたらうのに、表紙の折りを機械でできないのかなあ」
ブックデザイナーの祖父江慎さんと編集部とで、そんな話で盛り上がる。

この無謀な考えにつきあってくれたのが、多種多様な折りと綴じを得意とし、それらをさまざまに組み合わせる「これ、本当に機械で折り」製本したの?と、思わず疑ってしまうような印刷物をたくさん加工する「篠原紙工」だ。まずはこちらの希望を聞いて、できるか考えてみるということ、打ち合わせのスタート!



今回、実験に協力してくれたのは「有限会社篠原紙工」

「折る」「綴じる」「切る」「抜く」。豊富な経験と柔軟な発想でこれらの加工を行なう。糊で綴じる製本「ノリトジック」や飛び出す絵本のようなくみの「ブラップ折り」など、自社で開発した製法もさまざまある。頼れる紙工会社。

東京都江東区大島5-51-13
TEL 03-5628-0608
<http://www.s-shiko.co.jp/>

子どもがグシャッと したような折りって、 機械で折れる?

1



「うーん、機械でいけるかな……」とさすがに頭を抱える篠原さん(左)と、悪い笑みを浮かべてうれしそうなお祖父江さん



「こんな風に手でグシャグシャとした感じ」と喜ぶお祖父江さん

祖父江慎さんの事務所に、篠原紙工の専務取締役・篠原慶丞さんと編集部とで伺って、まずは打ち合わせ開始。

「本フランス装の書籍をつくりたいって、何回も出版社に頼んでいるんですが、あれは機械でつけれないからダメって言われちゃうんですよ。あの表紙、機械で折れないのかな?」(祖父江さん)

本フランス装の表紙は、斜め45度の折りが入ることもあり、表紙をつくる機械ではどうしてもできず、手作業になってしまうのだ。

「こういう形で折れるかは……書籍の本文用紙などを折る機械で紙をつくることを考えると、難しいかもしれません。パッケージや封筒などを折るサクマシなどなら、できる可能性があるかもしれません」(篠原さん)

「じゃあ、こんな風に子どもがグシャグシャしてしちゃったみたいに、折れるのかな? この前もらったDMは、大きな正方形の純白ロール紙にイラストが刷ってあって、その各頂点を中心に合わせてピタッと折ってあるんだけど、これ、おしいっ! せつかく絵柄が裏に透けたり、バリバリした紙を使ってるなら、グチャッといい加減に折った方がかっこいいのに、って思ってたの」(祖父江さん)

「う、うーん、グシャグシャと……ですか。まったくそのままは無理ですが、斜めに折るのを繰り返せばできるかな……(もごもご)」(篠原さん)

篠原さんは、頭を抱えて悩んだものの、ちょっと閃くことがあったようで、まずはテストしてみるということになった。まっすぐにしか折れないという噂の折り機で、斜めに折れるかな?

テスト1回目。たしかに斜めに折られているが、ちょっと物足りない

テスト2回目。今度は斜めっぷりがすごい!



テスト3回目。折り回数を1度増やし、かつ表裏色違いの紙(右)、片艶晒クラフトのような薄い紙(左)でも問題ないことがわかった

2 斜めにずらして 折ってみよう!

紙をグシャッと折った感じに、機械で折ってみる。できるだけ斜めに折って、それを何度か繰り返すと、最終的にずいぶん角同士がずれた折りになるのではないかな。通常はまっすぐにしか折れない折り機に、篠原さんがちょっとした補助具を手づくりして付け、折りテストをしてくれた。

1度目のテストでは、斜め折りの角度が狭く、折ってもかなり微妙な仕上がりに。「これだと、ホンのちょっとずれちゃったって感じだから、もっと大きく斜めに折れないのかなあ」(祖父江さん)

その意見を聞いて、より斜めに折る方法を考案して、機械折りしてくれたのが2度目のテスト。おお、これはだいたい斜めになって、いい感じ。あとは、紙を替えたりと3度目のテストを無事終えてわかったのは、「がんばれば機械で斜めに折れる!」ということだった。



篠原紙工で加工した他の折りや綴じを見て驚く祖父江さん。「これも機械でできるんだ!」

すごい! いいかげんが揃ってる!!

本誌に、右ページの「耳無芳一の話」が刷られた、特製「いいかげん折り」製本が投げ込み付録として入っているが、一見すると、ホントに折るのが下手な人がいい加減に、えいっえいっ折っているように見える。でも本当は機械で、きちんと斜めの角度を調整して折っている。なので、どの「いいかげん折り」も実は同じように折れているのだ。いいかげん折りしたものを下の写真のように重ねてみると、一目瞭然。どれも同じ「いいかげん」!

「これ、いいかげんが揃ってるんだ。おかしいねー」(祖父江さん)

「斜めの具合は、まだまだ調整できます。今回は簡易的な補助具をつくって折り機にセットし、折りましたが、これがかなりの量産になるとすれば、正式な補助具をつくったり、もっと改良もできると思います」(篠原さん)

人の手でいいかげんに折るのと違って、折り機では、きちんと決められた通りの「いいかげん」に折ってくれるので、今回の実験のように、最初から斜めの角度を計算したレイアウトをして、印刷物をつくることのできるのだ。



いいかげん折りをひとつ見ると「適当にグチャグチャに折ってる」ように見えるが、実はすべて設計通りぴっちり斜めに折られていて、できあがった折丁はすべてこの通り同じく折れ、重ねると揃っているのがわかる

実験結果

折り機できちんと

「いいかげん」に折れる!

これは、実際の仕事でも

使えそうだ!!

「これ、ホントに文庫本サイズの本として出したら、おもしろいよねえ。でも全ページ、カッターやペーパーナイフで切っていくのは大変かな」(祖父江さん)

「今回は一枚の紙を折って三十二ページの本にしていますが、これを一枚四ページにして丁合し、製本すれば、ページがどれも切れていて、斜めにずれた本をつくることもできます」(篠原さん)

うーむ、さすが。こちらがやりたいと思うことを伝えると、すぐに「こうしたらできる」「こんな方法がある」と提案してくれる。今回は各ページを切り進めながら読むというのも、物語と合っている気がしたため、一枚を折って三十二ページの本にすることにした。

それにしても、無理だと言われていたこ



祖父江慎
アートディレクター、ブックデザイナー。1959年愛知県生まれ。79年多摩美術大学入学。90年Cozfish設立、93年法人化、代表に。ブックデザインを中心に、並外れた「うっとり力」を持って多方面で活躍。今までの仕事をまとめた「祖父江慎+cozfish」の発売までとわずか!!

とも、チャレンジすればできるんだと、今回はしみじみ感動した。

今回のように本や冊子をつくるのもいいし、DMなどでこんな「いいかげん」に折ったものがくるのもうれしい。実際にこうしたい、「いいかげん折り」をした印刷物をつくりたい、というときは、もう篠原紙工にまかせればOKだ!

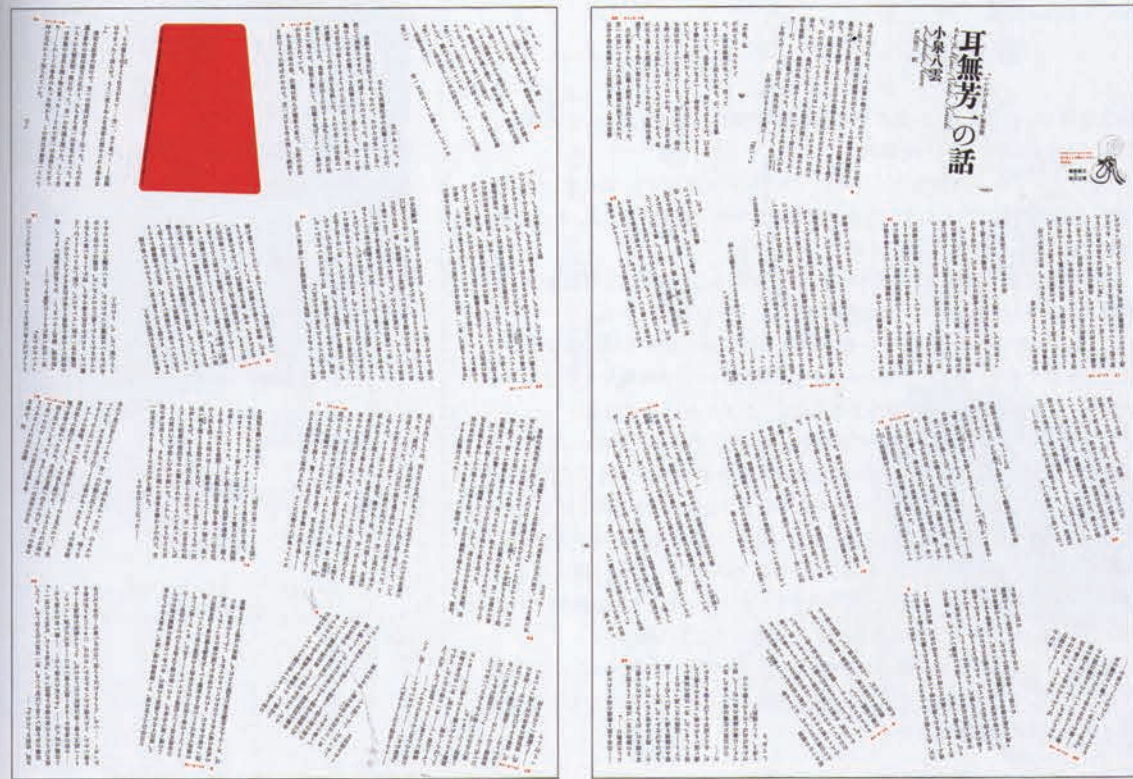
4

3



いいかげん折り製本版 「耳無芳一の話」をつくる!

斜めに何度も折ることで、グチャグチャに折ったかのように見えるこの折りを「いいかげん折り」と命名。どんなものを刷るとおもしろいかと、祖父江さんが知恵を絞る。そして決まったのが「耳無芳一の話」。全ページの形が異なるという前代未聞の本には、こんな怪談話が似合う!



四六判四割サイズに表裏2色刷り。これをいいかげん折りしていく。それにしても、祖父江さんにして「むずかし過ぎ!」というこの組版……。

紙は片艶晒クラフト紙を使用。そこに特色2色で上のデータを表裏に印刷。そのあといいかげん折りをして、最後にアイレット綴じ(めがね綴じ)。次ページで詳しく説明しているが、「いいかげん」っぽく折っているが、実は全部同じく折れている。どんな風に斜めに折れるかがあらかじめわかっているため、このようにその折りに合わせたデータをつくることのできるのだ。



折り終わった、いいかげん折りは、続いて篠原紙工で「アイレット綴じ(めがね綴じ)」して完成。耳無芳一の話は耳あり製本で、読む際には1ページずつカッターで切りながら、ソクソクする話を読み進めてください! 実物は本誌に投げ込まれています。

「おもしろい!」って飛びついたりいいけれど、これ、実際にデータつくってみたら、どのページがどんな角度でそこどう本文を入れるかって考えてつくると、すごく手間がかかった……」

